作品タイトル　スコッチエッグ

著者名　梨田のりこ

あらすじ

その朝、祥子は息子の横顔に元彼である岳の面影を見て驚く。料理人である岳からは様々な料理を教わった。結婚後は彼から習った料理を夫と息子が食べている。スコッチエッグが一番好きだという息子。その料理は祥子が試行錯誤の末作りあげたものだった。

本編文字数　４９３０文字

息子の横顔を何気なく見たとき、祥子ははっとなって目をそらした。あるはずのない面影がそこにあった。結婚する前の祥子の恋人である岳の面影が。一心不乱な眼差し、つるりとした頬、刈り上げたもみあげの青さ、首筋を照らす朝日の加減。記憶に残っていた岳の印象が息子に宿っていたのだった。

祥子は動揺する自分を落ち着かせようとしながら、大きな弁当箱に豚肉の生姜焼きを詰め込んだ。もっとも亮太は母親のそんな様子を感じ取るタイプでもない。おおらかとも、鈍感とも言える性格を夫から受け継いでいた。実際、がつがつと目玉焼きにかぶりついていて、顔を上げようともしなかった。

高校生男子のお弁当づくりは何を詰めるかで、毎朝頭を悩ませる。サッカー部の彼を満足させる量は半端ではない。弁当箱の一角には定番の厚焼き卵、もしくはだし巻き卵で、煮卵のときもある。卵の存在感はわかりやすく安定感があるし、味付けも濃いめにすると充分なおかずになる。何より、卵料理は息子もすでに出勤した夫も好物だった。

「ママのつくる卵料理は最高！」

今でこそ言わなくなったが、亮太が小学生の頃はよくそんなことを言って母親を嬉しがらせた。なんでも喜んでくれた子供時代はあっという間に終わった。今では髭の生え始め、いつもお腹を空かせていて、何を考えているのかさっぱりわからない息子となった。いっそのこと、昆虫のようなものだと思うことにしてみたら、不思議と落ち着いた。

大きな鞄に重たい弁当箱を詰め込んだ亮太を玄関まで見送ると、あからさまに不機嫌そうな顔をして、何見てんの？　と言った。さっきのは見間違いだと確かめたくなって、必要以上にじろじろと見ていたようだ。不機嫌な顔の亮太はそのまま外に飛び出していった。

岳とは夫と知り合う前に別れていたし、息子が似るはずはない。背は高くがっしりとした身体つきは夫とそっくりだったし、足のかたちは瓜二つと言ってもいい。

一人になった祥子は、週に一度のプラスチックゴミの回収日であることに気づいた。ゴミ箱の中で空になった卵のケースが何枚も重なっていた。冷蔵庫には卵のケースが常にあるし、ふたケースあることもあった。すぐになくなるので、買い物の時には欠かせなかった。

袋の中の卵のケースを見ているといても立ってもいられなくなり、思い切り押し潰してから袋の口をぎゅっと閉めた。ゴミ捨てを終えると、食卓の上の食器を食洗機に入れ、ラジオをつけ、コーヒーを淹れる。いつものルーティンをしても落ち着かない気分のまま、岳の顔、

身体、赤くふやけた指先が脳裏に浮かんだ。

当時、祥子はホテルや飲食店に食材をおさめる卸会社で働いていた。とあるホテルの和食料理の厨房の隣にある食材の保管庫に、週に一度食材の納品で訪れていた。その和食料理屋で働いていたのが岳だった。

入社二年目になるとそれまでは上司の後ろについていたが、その日は担当を任された初日だった。慌ただしさと緊張感で、作業着を車に積みこむのを忘れただけでなく、納めるはずの食材のひとつを忘れたのだった。その保管庫は冷蔵庫とほぼ同じ温度に設定されているので、いつも社名の入った分厚い作業着を着込んでいた。保管庫の中で震えながら、食材担当の岳に何度も頭を下げた。そんな祥子に、鼻水垂れてますよ、と岳は真顔のままキッチンペーパーの箱を差し出した。鼻の下を拭う紙はゴワゴワして堅かったし、彼の表情はそれ以上に堅かった。もともと取っつきにくい人だなと思っていたし、事務的な会話しかなかった。

「今日は間に合うんで大丈夫です。明日は必ず持ってきてください」

「本当に申し訳ありません。明日必ずお持ちします」

保管庫での仕事をなんとか終えて、意気消沈したままエレベーターの前にいると岳がやって来た。

「これ良かったら。賄いの余りだけど」

「あっ、どうもありがとうございます」

営業車の中でその小さな包みを開いた。中身は塩むすびがふたつとだし巻き卵だった。おむすびを囓ってみると、なんともいえない塩加減と甘味が身体中に染み渡った。それまで甘

い厚焼き卵しかしらなかったので、それがだし巻き卵というものなのだと後から岳から聞いた。その日をさかいに世間話をするようになった。

まもなく二人は付き合い始めた。土日も仕事の岳とは会える時間が限られていたせいか、一気に高まった。たまに厨房で仕事をしている岳を見かけることがあった。食材を剥いたり切ったりする長く赤い指先の滑らかな器用な動きと、それを見つめる横顔に胸を熱くした。

「食材を扱う仕事をしてるくせに料理も出来ないなんてさ」

料理をしない祥子をからかう岳に、じゃあ教えてよ、とアパートの狭い台所に二人で並んだ。初めて教わったのがだし巻き卵だった。かつおぶしから出汁をとることからはじまった。

「インスタントじゃだめ？」

「だめってことはないけど、それじゃあ良い味にならない」

「料理って面倒だなあ」

「なにいってんだよ」

そんなことを言う岳の身体にぴったりと寄り添い、鍋の中で鰹節がひらひらと舞うのを眺めた。このとき、鰹節からだしを取ると料理は上等になることを知った。

黄金色の出汁を溶いた卵に流し入れたときの、神妙な岳の顔には信念とも、こだわりともいえる強い思いみたいなものがあった。熱くなったフライパンに卵液が流し込まれると、黄色くふつふつと軽やかに沸き立った。菜箸と卵液が踊るように絡まり合いながら、あっという間にまとめられ、新たな卵液が流し込まれた。幾重にも重なり、まとまりあっては膨らんで、形作られていった。出来たての卵焼きを食べたあとは、出汁の匂いが部屋中にひろがる中で愛しあった。

「上手く作れる気が全然しないな」
「初めから上手くいかれちゃ俺も困る。ここまで来るのに何百回も焼いたんだ」
その答えに祥子はげんなりしながらも、少しでも良いところを見せたくて彼の教えに素直に従ったし、こっそり家でも練習したりもした。
小器用なところのある祥子は、岳から教えられた料理をすぐに習得していった。親子丼も茶碗蒸しも鰹節から出汁をとって作った。試食した岳は美味いね、と褒めることはまれだった。もう少しこうした方がいいとか、温度が低いとか高いとか、批評をしてきた。それでも彼に料理を教わり、料理の出来映えを聞いたりすることが、楽しくてたまらなかった。
岳と付き合い始めて二年が過ぎた頃、彼は自分の店を持つのだとそれまで働いてきた職場をあっさりと辞めた。
「岳の仕事に口を出そうとは思わないけど、前もって言って欲しかったな」
「ごめん。バタバタしてたし、思ってた以上に事が上手く進んだんだ」
自信に満ちた顔で答えた。祥子は彼が独立することが正直不安だった。岳は仕事熱心だったし、料理に対しても持論というのかこだわりが強かった。付き合いはじめの頃はそれが頼もしくて憧れの目で見ていたが、祥子も働くようになって世間を知った。いつの日か、岳がその分厚い壁にぶつかって、壊れてしまうか、下敷きになってしまわないか不安だった。
「祥子には迷惑かけないよ。資金は実家が支援してくれるんだ」
実際、彼の実家は古くからの農家で副業にアパート経営をしたりしてお金に困ってはいないことも、心配のひとつだった。店を開くと岳はますます忙しくなり、祥子も責任のある仕事が増えた。

半年ほど過ぎた頃、店が軌道に乗れていないことに気づいた祥子は、いくつかの提案をした。そういうのを嫌がるのはわかっていても黙っていられなかった。
「祥子に言われなくてもわかってるよ。いちいち口出ししないでくれ」
「岳にこだわりがあるのはわかるし、美味しいものを提供したい気持ちが強いのもわかる。だけどそれだけじゃ経営はできないよ」
「知ったふうな口をきくなよ」
冷たい口調と目つきで言う彼はいそいそと包丁を動かし続けた。それでも、祥子は急いで仕事を済ませて店の手伝いをしにいくと、岳はすごく嬉しそうな顔をした。そんな無邪気さを許せたのははじめのうちだけだった。岳の料理は美味しかったが、彼の店には何かが足りなかった。成功する店にはそうなるだけの空気があるものだ。
結局、一年もたたずに店を畳むことになった。
「実家にこれ以上借金も出来ないしね」
「またチャンスがめぐってきたらお店を再開させたらいいよ。そういう店主って結構いるから」
それが精一杯の励ましの言葉だった。
「祥子はその手のことに詳しいもんな」
「仕事柄、そういう人たちと会うことも多いから」
そのとき、岳の横顔がさっと冷たく曇った。
「なんかさあ、アドバイスくれたって良かったんじゃないの？　こうなる前にさ」
「何度か言ったよね。このままだとすぐに上手く行かなくなるって。岳は理想と夢が高過ぎ

るんだよ。現実を全然見てないよね」
そう言った瞬間、灰色に沈む彼の包丁が目に入った。祥子は即座に立ち上がり店を後にした。悔し紛れからそんな言葉をぶつけてきたのだと理解することも、これ以上関係を続けるのは無理だとさっさと見切りをつけたのも、若さゆえだった。
その後、岳は何度か連絡をしてきたが、祥子は連絡をしなかった。別れ話もないまま自然消滅した。

翌年、祥子は結婚した。夫は祥子の手料理を素直に喜びよく食べるので、祥子も張り切って腕を振るった。気づかないうちに料理上手になっていた。
「この前、ちょっと良い店に上司に連れてってもらったんだ。ほら、よくテレビに出てくる親子丼の有名な店。そこで食べたのと変わらないよ。こっちの方が美味しいくらいだよ」
祥子の作った親子丼を美味しそうに夫は頬張った。
「どう考えたって、プロにはかなわないでしょ」
「そうかなあ、美味いよこれ。お母さんから習ったの？」
「うん、そうだけど」
「料理が美味いって幸せなことだよな」
息子が生まれて日常が忙しくなるとともに、祥子の作る味がこの家に染みこんだ。夫も息子も卵料理が好物で、厚焼き卵、親子丼、オムレツ、オムライス、かに玉、茶碗蒸し、おでんの卵。風邪をひいたときや体調不良のときにつくるたまごふわふわは、市販薬よりも効くと言って定番になった。どれも岳から教わったものだが、そんなことも忘れていった。

夕方、祥子は冷蔵庫を開けた。卵はふたケースある。昨日はスーパーの特売日で卵が安かった。煮卵を作っておこうと、鍋に卵を入れ茹で始めると亮太が帰ってきた。期末テストが近くなると部活動は休みになる。鍋の中で整列している卵を見下ろしながら亮太は言った。

「スコッチエッグ食べたいな」

「そういえば最近作ってなかったね。でも挽肉がないから無理だよ」

「買ってくるよ。合い挽きを買えばいいんでしょ」

よほど食べたいらしい。祥子は苦笑いしながら答えた。

「1キロ、お願いね」

行ってくる、と答える亮太の表情には岳の面影など微塵もなかった。祥子は半熟に茹で上がった卵を氷水につけた。殻を剥くと冷蔵庫に入れてしっかり冷やす。こうすると揚げても半熟卵のままでトロリとして美味しい。

絵本に描かれたあったスコッチエッグを食べたいと亮太が言ったのは4歳か5歳のときだ。食べたことがなかったので、料理本やネットで調べて作ってみた。初めは卵が茹ですぎたり、揚げている途中で破裂したり、味付けもイマイチだった。けれど、夫も息子も美味しいといって残さずに食べた。何度も試行錯誤をしているうちに祥子の味が出来上がった。

キャベツの千切りをはじめると、軽やかな包丁の音が台所を満たした。たどたどしく包丁を扱っていたことなど遥か昔のことだ。

「買ってきたよ」

息を切らしたまま台所に駆け込んできた亮太は、挽肉の入った包みを高々と掲げた。

「そんなに好きだったっけ、スコッチエッグ」
「卵料理の中で一番好きだな」
嬉しそうに笑う息子に、無邪気なだけじゃ生きていけないんだからね、と心のうちで呟いた。

【完】